# 甑島(こしき)のパパねずみ

## 離島に移り住んだ私たち家族の〝自然生活(ネーチャーライフ)〟

斉藤きみ子

# 甑島のパパねずみ

斉藤きみ子

〈著者招介〉

本名 斉藤公子

1949年生まれ

日本児童文芸家協会研究会員

「ひしのみ」同人


甑島のパパねずみ

昭和六十年四月十七日 第一刷発行

定価九八〇円

著 者 斉藤きみ子 〈検印省略〉

発行者 石川晴彦

発行所 株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台二ノ九

郵便番号 一〇一 振替 東京二―一八〇番

電話 (編集) (03)二九四―一一二一

(販売) (03)二九四―一一二三

印刷所 大日本印刷株式会社



もし落丁・乱丁・その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。お近くの書店か本社へお申しいでください。

© Kimiko Saitō 1985 Printed in Japan



ISBN4-07-921987-3

## はじめに

私たち家族が、家財道具らしいものは何も持たずに、まことに身軽な心と体だけでこの島にやってきてから、四年の年月が過ぎ去りました。

長女の麦子が小学五年生、長男智顕が小学一年生、末娘だった真澄が満三才という春のことでした。

二年目に、二男の拓生が生まれ、いまは一名増員の六人家族というわけです。

鶏を飼い、畑仕事をし、釣りもして、生計を立てています。

この甑島は、九州西南海岸、鹿児島県串木野市から約四十キロの沖、東シナ海上に浮かぶ小さな列島です。

まどろめるおとぎの国といった趣の、とても美しく、また珍しく、古い地形を持つ島です。なにしろ二十億年も昔の微生物がいる池があるのです。二十億年ですもの。太古の太古の不思議さを秘めた島なのです。

海の幸、山の幸、里の幸にも恵まれて、人々の暮らしの中には、昔ながらの生産活動が息づいています。

「大草原の小さな家」の家族のように……とはいきませんが、ガンバルマンのパパと、少少落ち着きには欠けるものの、若さで張り合いたいママと、その子供たちが、いっしょに

働き、いっしょに遊び、いっしょに勉強できるような、うんと楽しい生活を実現しようと、やってきたのでした。

ちなみに「大海原の小さな島」物語とでも呼んでいただきたいこの島での生活は、私たち夫婦と子供たちに、離島ゆえのどっさりの楽しみと喜び、心に響いてくる離島ゆえの悲しみと辛さを、考えさせてくれました。

そして、それらの得がたい体験は、私たちの心に育ち、私たちに、ヒューマン・ネーチャー（人間の自然）とは何かを語りかけてくれるのでした。

おおた慶文さんの美しく愛らしい絵は、舌足らずの私の文章表現を十分すぎるほど補ってくださったうえに、花となって咲き、それ一つで、愛となり、感謝しています。

私たちの子育てを、とり上げてここまでまとめてくださったのは、主婦の友社の深尾恭子さんです。的確でご親切なアドバイスや、名もない私たちのために払ってくださった苦労を思うと、頭を下げることしかできません。ほんとうにありがとうございました。

さて、読者になってくださった皆さま、私たちの貧しくもおかしい島暮らしを、お楽しみください。

一九八五年　三月

甑島にて

斉藤きみ子



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次

甑島のパパねずみ

最後のクリスマス　7
言葉は輝く星です　16
私たちの夢　24
二人の出会いがすべてのルーツ　31
甑島に決まる　41
旅立ち　45
〝新しいお菓子もあります〟　52
全部子供部屋　55

手仕事事始め　59
鶏飼いを始めました　67
ミミズ君もありがとう　71
甑島のパパねずみ　77
赤ちゃんが生まれます　82
絵本を作りました　84
雨の日のテントごっこ　91
春の野山はごちそうなのです　95
子育てのチャンス　97
子供たちはたいせつに育てますから　99
楽しいキャンプ　103

海のプレゼントとお話作り　107
変装ごっこのために　113
愛いっぱいのうな重　117
音楽が合図です　121
わが家の生活は豊かか？　貧しいか？　124
私も鶏の仕事をします　130
帰ってきたアヒルもどき　132
マムシとお友達？　135
セミの孵化　138
七色あんこ物語　140
鶏を処分するとき　143

家庭での授業　146
人間の体を学ぶ　149
村の人たち　177
上京の前後のこと　189
パトとヨネ　196
プレゼントの道　206
田舎へ移り住みたいかたのために　211
拓ちゃんは、ニャンコです　218

イラスト／おおた慶文
撮影／斉藤　哲（著者の夫）

# 最後のクリスマス

十二月は、わが家にとってとても忙しい月です。忙しいと言っても、うんざりする忙しさではなくて、つらい忙しさでもなくて、もうやたらうれしい忙しさの月なのです。

なぜならば、この月にはクリスマスがあるからです。

十二月に入ると、私たちは、押入れの奥から「クリスマスセット」と書かれている大荷物を引っぱり出します。そこには、ツリーに飾るものや、クリスマスソングのレコードや、テープ類や、サンタさんの衣装が入っています。

「きょう、ママは〝クリスマスセット〟を出すことにするわ」と、私が言いますと、子供たちは大喜びです。

私は、大きな木を夫に用意してもらって、高い高い、天井にも届くほどの、たいへん大きなツリーをまず立てます。

それから、サンタクロースの衣装の白いほわほわのボタンが、ちゃんとついているかどうか点検して、そのあと、玄関にありとあらゆるクリスマスに関するものを展示し、飾りつけるのです。

その間、もちろん私は、クリスマスソングを家中にとどろかせて、自分もその曲を口ずさみながら、一日じゅう、クリスマスのメニューのことなどあれこれ思案するのでした。

クリスマスの集いは、たいてい四つか五つありました。

特にたいせつなのは、教会のものと、わが家のホームパーティーで、あとは、私たちの末娘が通っている保育園のもの。この保育園では、私が園長ということになっていますので、私はそこでは重要なスタッフです。そのほかには、スイミングクラブの親しい家族とのもの、それから、私たちが経営していたコーヒーショップのお客さまが、「ことしこそは、やろうよ」と言ってくださる要望のクリスマスもプランしていました。そのほか、親しいお友達とのエトセトラ、エトセトラ。

「ことしは、ほんとうに忙しいわ」と、私はうれしがって、バタバタと動き回りました。

たくさんのクリスマスの中でも、一番のメーンは、やはり、ホームパーティーです。ですから、わが家のクリスマスは、いいえ、十二月は、家じゅうをクリスマス一色にするところから始まって、一番最後に、わが家のツリーを片づけるところで終わるのでした。

クリスマスツリーは、みごとなものでした。子供たちを驚かせたり、喜ばせたりすることの大好きな私たちは、とにかく、野外においても映えるほどのものを用意しました。

末娘の通っている保育園に、それほどのツリーを持ち込もうとして、失敗したことがあります。園舎に入らなかったのです。そこでしかたなく、小さな庭に飾りました。庭には、天井というものがありませんから。どこまでも高く、堂々たるツリーは、年に一度のうれしい日を待つにふさわしいと、私は思うのですが、運営委員会のメンバーは、苦笑いします。「園長ばっかり張り切ってる」って。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

保母さんまでが、「小さいツリーでけっこうですよ。子供たちは皆、小さいんですから、大きなツリーが、お部屋にどかっとあっては、お互いの顔が見えないし、ツリー全体が見えませんよ」

「あら、そうかしら」と、私は言いながら、彼女らが用意した小さなツリーをお部屋に、それから、大きなツリーを、庭に、おかせてもらうことで、いつも満足していました。

どっかりとした、空へ伸びていく木は、子供たちに、「ほら、こんなふうに、ぐんぐん大きくなってね」というメッセージを伝えるような気がして、それが子供たちにわかってもらえそうな気がして、とても晴れ晴れとした気持ちになるのでした。

実際子供たちは、この木を見て、「うわあ！」と、叫ぶのです。

メンバーには悪評ながら、私はひそかに、子供たちは絶対喜んでくれていると信じて、毎年、夫と二人、大きなツリーを、園庭に運んだのでした。

十二月の上旬には、クリスマスカードを、わが家の子供たちと作ります。ていねいに、アイディアを盛り込んで、親しい人たちに送ります。

長女の麦子などは、たった一枚のクリスマスカードに、十時間かけるようなこともあります。でもそれは、特別の人にだけ。彼女の大好きなイングリットさんにだけです。それで、お返しの年賀状には、わが家を代表して、麦子にハガキが届いたりするのです。

「とてもすてきなクリスマスカードありがとう。お父さまとお母さまにも、よろしく」

十二月の中旬には、そろそろ集いが始まります。子供たちのスケジュールを聞きます。

「十八日は、ヤスコちゃんたちと。二十一日は、子供会で。二十三日は、バレエの……」
「あら、だめよ、二十三日は、ムーミン保育園のクリスマスよ」と、私。
末娘の通う保育園はムーミン保育園と言うのですが、そこでは、園児と親だけでなくて、園児の全部の家族が集まることになっているのでした。それで、麦子だって、参加することになっていましたから、「あ、そうなの。じゃあ、私、二十三日の分は、よすか、他の日にかえてもらうか、どちらかにするわ」と、いうことになります。
こんなふうで、私たちは、あちこちのクリスマスの集いをこなして、そして、二十四日は教会で、二十五日は、わが家で、一番大きな楽しい集いをするのでした。
ふだんは、ろくにお祈りもしない罪深い私たちが、ことクリスマスになると、にわかに神様を思い出して、懺悔ならぬお祭りをするのですから、天のイエス様は、きっとため息をついておられることでしょう。
けれども、一年の最後の月に、救世主があらわれて——というプランは、私には、まことにありがたいことなのでした。
一年間のうちには、つらいことや悲しいことがどっさりありましたから、新しい年を考えるとき、ただ目の前だけを見ていたら、めいってしまいそうになるのです。
現実から目をそらすことがよいことだなんて、これっぽっちも考えてはいませんが、気分としては、「きっときっと、よい世の中になって、皆が幸せになる日が来ますよ。来ますとも！」と、子

供たちにひと言でも言ってあげられるようでありたいのです。

そういうとき、「主は来ませり、主は来ませり、主は、来ませりー」と、大声で歌えることを、幸せに感じてしまう私なのです。

「主、われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらじ――」

こんな子供のための歌も、弱虫の私の心をふるわせ、元気にしてくれるものです。

ですから、十二月になると、頭かかえ込んでの悩みの多い暮らしも、パッと晴れ渡って、私は皆と口そろえて、民の一人として、すばらしい宇宙の果てからやってくる、すばらしい存在に、頭をなでていただこうと考えるのでした。

「お前は、この一年間、がんばりましたか。次の年も、がんばりなさい。よい年になるように、人人のために働くのですよ。私は、お前の働きを、じっと見ていますよ」

そんなふうに、言われたいのでした。言われていると、感じたいのでした。

無知で、無欲で、ほんとうに小さな存在になって、甘い思いにひたることのできる十二月。子供たちといっしょに、プレゼントを待つことのできる十二月は、すばらしい月なのです。

「園長ばっかり張り切っている」と笑われても、私には、子供のように切実な思いがあるのでした。クリスマスを待つ心のときめき。優しい人があらわれて、私に、新しい年への勇気を吹き込んでくださる十二月だからです。

その年、一番上の娘、麦子は、小学四年生でした。二番目の息子は、智顕(ともあき)。彼は六才で、末娘の

真澄は三才。私たちは、五人家族でした。
私たちは、静岡県の中伊豆に住んでいました。
ちょっぴり、さびしいクリスマスの終わりでした。それは、もう次の年から、こうしたクリスマスは開けないことになったからです。
真澄が通っていたムーミン保育園は、次の年の春で、閉園することになっていましたし、私たち家族は、ここを離れて、九州の離島へ、一家で移り住むことにしていたからです。
わが家のクリスマスのおしまいに、私は、子供たちにこう言いました。
「新しい年になったら、甑島へ行く準備を始めなければいけないから、パパもママも、家にいて、いろいろと用事を片づけていくことになると思うの。皆、協力してね。それから、きょうのクリスマスは、とても楽しかったわね。来年からは、もう教会のないところだし、お友達とのクリスマスもできないことになっちゃうけど、伊豆でのクリスマスのことは、忘れないようにしようね」
「ねえ、ママ」と、智顕が言いました。
「甑島にも、サンタさんは来てくれるでしょう？」
私と麦子は、顔を見合わせて、それから、二人とも、夫のほうを見ました。
「だいじょうぶよ。サンタさんも連れてゆくから」
夫は、にやにや笑いました。
「ママって、そんなにサンタさんと仲よしなの？」

「ええ、そりゃあ、とっても親しいのよ」

麦子は、サンタの正体を知っていますので、ゲラゲラ笑い転げていました。ほかの子供たちも、うれしくて笑いだしました。

子供たちが寝静まってから、私は、これからの生活のためにいろいろと調べ物をしていました。離島へ夫と二人、子供たちを引き連れて行くのです。どんな生活が待ち受けているでしょうか。ちょっぴり、不安はありました。こんなに仲よくつきあっている友人家族ともお別れです。ムーミン保育園のかわいいおチビちゃんたちの顔も見ることができません。それに、私たちのお店にやってくる、よい人々とも、お別れです。

私は、ふと、お部屋の電気を消して、さっきまでにぎやかだったクリスマスツリーの下に立ちました。美しい月光が、あふれ返るほど、部屋の中に注ぎ込んできました。高い天井で、広い窓、芝生とばらの花が咲く、この家とも、お別れです。

どうして、そんなにまでして、離島へ行かなくちゃいけないの？と、友人たちは尋ねました。私たち、子供たちにいろいろしてあげたいことがあるのと、私は答えました。いまだって、十分してあげているじゃないのと、友人たちは言いました。いいえ、ただ食べさせて、服を着せて、学校へ送り出しているだけだわ。それではいけないことに気づいたの、と私。それ以外に、いったい何をしてあげるって言うの？　ワカラナイ、と私。ワカラナイけれど、私は、もっといっぱいいっしょ

に遊んだり、勉強したり、働いたりする、時間がほしいのです。
「離島に行くほうが、子供のためにはならないわよ。教育をどうする気なの？」
「自然がいっぱいあって、豊かな教育環境になるわ」と、私は答えました。
「あなた、甘いわ。子供には、学校が必要なのよ」
「ええ、わかっているわ。でも、学校だけが教育の場ではないし、それに島にだって、学校は、あるのよ」
「話にならないじゃないの。しっかりしてよ」と、友人たち。
こんな議論を、もう三カ月もつづけたあげくの結論でした。
灯の消えた部屋の中に、大きなツリーが、優しく月光を受けて、立っていました。
ぜいたくは、できない。貧しい生活になるのは覚悟のうえ。そんなことを力説しても、だれも、賛成してくれませんでした。
「でも、私には彼がいるから心配要らないのよ。そりゃあ私たち、経済力もないし、こんな世の中では、とっても力量のない人間同士だけれど、それでも二人いっしょだから、とても心強いの。甘くても、理想主義と笑われても、私たち、納得して生活したいの」
これで、話し合いは、おしまいになりました。皆、合点いかぬ面持ちながら、「ええ、あなたたちは、伸び伸びやるのが一番いいかもしれないわね」と、言ってくれたのでした。
お店も、おおかた、処分のめどが立ちました。仲よしでやり始めたスイミングクラブのほうも、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com